

カイトと
リュウさんの

博物館へ行こう

その7 沖縄県立博物館・美術館

今回は
沖縄県に来たよ！

青い空と青い海！
めっちゃキレイや〜！



なので、私たちも
沖縄の歴史を
学びに行き
ましょう！



今年(2017年)の
弥生博では、特別展
「沖縄の旧石器人と
南島文化」が開催
されるんだ。

ところで、
なんで沖縄なん？



2017年7月1日(土)~9月18日(月・祝)まで

入り口が海の中
みたいや〜。



迫力
あるね〜！

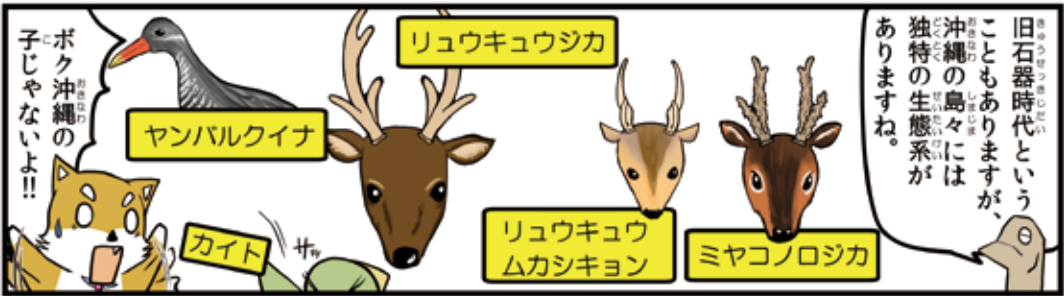
デカイ！

まずは那覇市の
新都心にある
沖縄県立
博物館・美術館に
行きましょう。



弥生博の
カイトと
リュウさん

カイトとリュウさんは、大阪府立弥生文化博物館の展示品から飛び出した、博物館のキャラクター「館キャラ」です。本冊子では「弥生遺跡」や各地の「博物館」を訪ねて日本中を駆けめぐります。二匹？の活躍にご期待ください！



国内各地には、それぞれの地域の歴史や風土に合わせ、個性豊かな博物館が設置されています。

カイトとリユウさんの 博物館へ行こう



まだ見ぬ博物館では、新しい発見と出会いがアナタを待っているはず。

カイトと
リユウさんの
博物館へ行こう

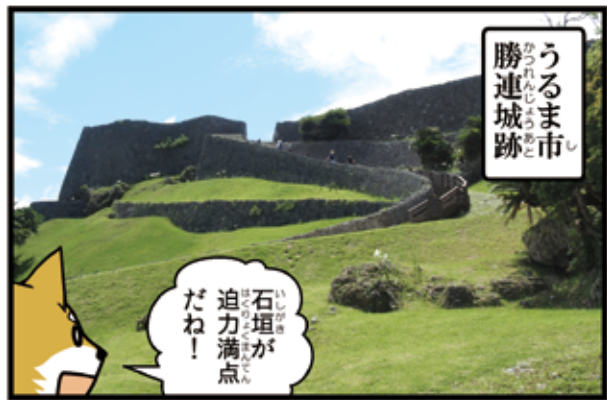
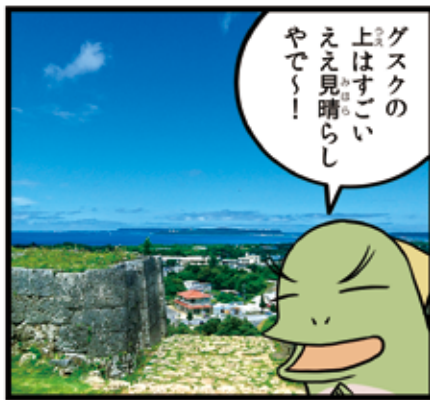
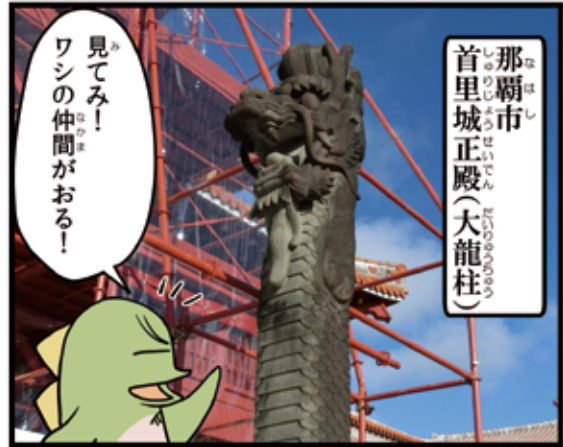


ぜひ足をお運びいただき、豊かで奥深い歴史と文化にふれてみてください！

カイトと
リュウさんの
博物館へ行こう



カイトとリュウさんの 博物館へ行こう



カイトとリュウさんの 博物館へ行こう

サキタリ洞遺跡は沖縄島の南部、沖縄県南城市にあります。南城市は琉球王国を統一した尚巴志の出生地

わたしはアムちゃんよ。
よろしくね。



はいさい。(こんにちは)
わたしはミユウじい。
ゆたしくつにげーさむら。
(たのしくお願ひします)

©うきまころん

でもあり、その名の通り多くのグスク(城)があることでも知られています。湿润な亜熱帯に属する沖縄の島々には、隆起サンゴ礁からなる石灰岩が広く分布しています。石灰岩は水に溶けやすく、あちこちに洞穴(鍾乳洞)が見られます。こうした洞穴では、石灰岩に含まれるアルカリ分(炭酸カルシウム)の作用によって、骨や貝などの化石がよく保存されることから、沖縄は日本における化石研究の重要なフィールドとなっているのです。



▲沖縄島南部の沿岸に広がるサンゴ礁



▲人骨が発見されたフィッシャー(港川遺跡)

中でも、サキタリ洞遺跡の近隣にある港川遺跡(沖縄県八重瀬町)から発見された約二万年前の港川人は、一号と四号の四体分の全身骨格からなり、日本列島の旧石器時代人の代表例となっています。一号は男性、二と四号は女性で、男性の推定身長は一五〇と一五五cmと小柄で、特に華奢な上半身に対して、下半身は比較的発達しています。食べ物を噛み砕く咀嚼のための顔面構造は頑丈で、粗末なものもよく噛んで食べる、放浪性の生活を送っていたと考えられています。また、頭骨

主に火山灰からなる酸性土壌に広く覆われた日本では、旧石器時代の石器が出土する遺跡は多く知られています。が、人骨や動物骨が出土する遺跡は非常に限られています。特に、北海道から九州にかけての地域では、旧石器時代の人骨は、わずかに静岡県(浜北)の(約)一万八千年前)の一例のみとなっています。しかし、沖縄では港川人をはじめ、日本最古となる約三万六千年前の人骨として知られる山下町第一洞穴



▲港川人4号頭骨

や下顎骨の形態分析から港川人は東アジアやオーストラリアなど、南方に分布する人類集団に共通する特徴が見られることから、南方起源の人類集団だと考えられています。

カイトとくさんの 博物館へ行こう



▲港川人1号骨格（レプリカ）

人（沖縄県那覇市）や、約二万年前の白保竿根田原洞穴（沖縄県石垣市）など、多くの旧石器時代人骨が発見されています。

港川人をめぐる謎

港川人の発見者、大山盛保氏は、沖縄の戦後復興に尽力した実業家で、初の民間給油所の設立や、カメラなどの光学機器の製作を手掛けたことでも知られています。大山氏は、一九六七年に農園のため池建設用に購入した石材の中から動物化石を発見し、「動物の化石が見つかるということ、それを追いかけてやってきた人類の化石も見つかるのではないか」という信念か



▲港川人の発見者大山盛保氏（大山盛保氏提供）

ら、石材の出所を突きとめ、港川の採石場にたどり着きました。その後、仕事の合間をぬって家族や社員、県内



▲調査当時の港川遺跡

外の研究者の支援を得て発掘を続け、一九七〇年に港川人を発見しました。港川人は、石灰岩の採石場に露出した深さ約二〇mの岩の割れ目（フィッシュヤー）の中に落ち込んだ状態で発見されました。人骨と一緒に回収された木炭の放射性炭素年代測定の結果、約二万年前のものであることが明らかになりました。

なぜこのような岩の割れ目の中に人骨が埋没したのでしょうか。不慮の事故や天変地異、あるいは葬送儀礼など

さまざまな説がありますが、結論は出ていません。また、港川遺跡からは、港川人の時代の石器などの文化遺物や生活の痕跡は発見されておらず、他の沖縄の旧石器人骨遺跡でも同様に、動物化石とともに人骨のみが発見されることから、沖縄の旧石器人の生活場所や文化については考古学的手法がかりが全く得られていませんでした。

さらに、港川人の時代以降、沖縄では一万年以上にわたって人類の存否が定かでない「空白の時代」が続くことから、港川人はその後の人類集団にはつながらず、絶滅したのではないかといい説もあります。

サキタリ洞遺跡の発掘

こうした課題を踏まえて、沖縄県立博物館・美術館では、二〇〇七年から、新たな人骨化石や旧石器の発見をめざして、沖縄島南部で継続的な発掘調査を行っています。

二〇〇九年からはサキタリ洞遺跡（カングラーの谷内）の発掘調査を開始し、洞内外の三箇所（調査区Ⅰ、調査区Ⅱ、

調査区Ⅲ)で発掘を行っています。
サキタリ洞の周辺には、河川的作用でできた石灰岩の谷や洞穴からなるカルスト地形が広がり、独特の景観を形成しています。現在、この谷は「ガンカラーの谷」として、観光施設(ガイドツアーコース)となっています。サキタリ洞はこのツアーコースの出発点に位置しています。
サキタリ洞は、東を陥没(かんぼつ)ドリーネ、西をカルスト谷によって断ち切られた



▲サキタリ洞遺跡の発掘調査の様子(調査区Ⅰ)



▲サキタリ洞遺跡出土の人骨(歯)(左Ⅰ層出土、右Ⅱ層出土)

貴通型の洞穴で、体育館のように大規模なホールとなっています。その面積は約六二〇㎡、天井の高さは約七mを測ります。この遺跡の大きな特徴は、約四万年前以降近代に至るまでの各時代の地層が積み重なった状態で見つかったことで、これほど長期にわたる地層が保存されていることは珍しく、貴重な遺跡となっています。
また、石灰岩洞穴であることから、骨や貝など、通常の遺跡では残りにくい遺物が良好な状態で保存されていた

ことも大きな特徴となっています。
サキタリ洞遺跡の調査区Ⅰでは地表下約二・五mまで発掘を実施し、後期旧石器時代の堆積層(たいせきそう)が確認されています。堆積層中からは、多量の陸産貝類(カワツムリ)や淡水産貝類(カワニナ)、甲殻類(カニの鉗脚(かんせう)など)とともに、海産貝製の貝器や石英製の剥片石器類、人骨が検出されました。
調査区Ⅰでは、表土直下に石灰分に



▲サキタリ洞遺跡(調査区Ⅰ)の地層(黒い部分がⅡ層)



▲サキタリ洞遺跡出土の動物遺存体
カニの鉗脚(上段)とカワニナ(中段)、カワツムリ(下段)

よって固結化したフローストーン層(F S層)が約三〇cmの厚さでほぼ全面に分布していました。このため、ツルハシや削岩機(さくがん)を使用してこのF S層を除去し、下層の調査を行いました。
その結果、F S層より下位の堆積物は、ⅠⅢ層に区分できることがわかりました。このうちⅡ層は炭化物を多く含む黒色を呈する堆積層で、非常に多くのモクズガニの爪(鉗脚)、カタツムリ、カワニナ等の動物遺存体が含まれていました。このⅡ層の上位に位置

カイトとキュウさんの 博物館へ行こう

する褐色土層をⅠ層、下位に位置する褐色土層をⅢ層として区分しています。Ⅲ層以下については、現在のところ部分的な調査に留まっていますが、放射性炭素年代測定の結果、FS層からは約一万一千〜三千年前、Ⅰ層からは約一万六千〜一万四千年前、Ⅱ層からは約二万三千〜二万年前、Ⅲ層からは約三万七千〜二万三千年前と、ほぼ層序と整合的な年代値が得られています。

沖縄の旧石器人とその文化

調査区ⅠのⅡ層からは、断片的な人骨や多量の動物遺存体とともに七〇点を越える海産貝類が出土し、その中には巻貝製釣針や貝ビーズをはじめとする豊富な貝製品が含まれていました。またⅠ層からも断片的な人骨とともに、石英製石器や巻貝製ビーズを含む貝製品が少量出土しています。

一方、サキタリ洞遺跡では排土のフルイ作業を実施したにも関わらず、九州以北の旧石器時代遺跡では普遍的に見られる打製石器類が、ほとんど出土していません。このことは、改めて沖



▲Ⅱ層出土の貝ビーズ

昔の人たちもおしゃれを楽しんだのね。



縄の旧石器時代遺跡における石器類の希少性を印象つける結果となりました。貝器類のうち、Ⅱ層下部から出土した約二万三千年前の巻貝製釣針は、全



▲Ⅱ層出土の巻貝製釣針（全長 14 mm）

この釣針でウナギなどを釣ったのかのおく。



長一四mmと非常に小型で精巧なつくりのもので、世界最古の釣針です。他に素材と考えられる貝片や未成品も出土していることから、この場所で釣針の製作が行われていたと考えられます。釣針が出土したⅡ層からは、ウナギや



▲Ⅱ層出土の扇形貝器とクジャクガイ貝器

海産魚類の骨が少量見つかったことから、そうした魚類の捕獲に用いられたのかも知れません。このほか、Ⅱ層から出土したシマワスレヤツノガイ類、Ⅰ層から出土したマツムシは、糸を通して連ね、装飾品（ビーズ）として利用されたと考えられます。

Ⅱ層から出土したマルスタレガイ科の扇形貝器やクジャクガイについては、



▲I層出土のトコブシ（ナガラメ型）
（現在ナガラメは種子島の名産として知られる）

まだ具体的な用途は明らかになっていませんが、加工痕や使用痕から見て、貝殻程度の強度であっても加工可能な材質、例えば植物質などを対象とした加工具としての利用が想定できます。

貝が語る旧石器時代の沖縄

興味深いことに、調査区Iの旧石器時代層から出土した海産貝類には、マルスタレガイ科（マツヤマワスレ）やトコブシ（ナガラメ型）といった、現

在亜熱帯に属する沖縄では見られない、大隅諸島以北の暖温帯に分布する貝類が含まれていました。

なぜ現在沖縄近海に分布していない貝類が出土するのでしょうか。二万年前後の世界は、氷河期の最寒冷期にあたり、沖縄周辺の海水温も現在よりも低かったと考えられます。サキタリ洞遺跡の旧石器時代層からは、シャコガイなどのサンゴ礁特有の貝類は出土しておらず、当時沿岸部には、現在見られるようなサンゴ礁は分布していなかったと考えられます。

こうした環境下で、暖温帯のマツヤマワスレやトコブシが、沖縄周辺まで分布していたと考えられます。仮に、二万年前の沖縄が、大隅諸島程度の氣候だったとすると、当時沖縄では冬に雪が降ることもあったかも知れません。翻って現代は、人類による環境変化によって地球規模での温暖化が進行しつつあると言われていますが、二〇一六年一月には、沖縄島で観測史上初の降雪（みぞれ）が記録されました。今後人類は、激変する環境に適応することができのでしょうか。

洞穴内に葬られた人骨

二〇一五年のサキタリ洞遺跡の調査では、調査区IIから一体分の人骨が交連した状態（つながった状態）で発見されました。人骨は仰向けに横たわった状態で、人骨の直上には三〇cm大の石灰岩礫が四個配置されており、人為的に埋葬されたものと考えられます。人骨が埋没していた地層の上位には、九千年前の土器（押し文土器）を含む地層があることから、人骨は少なくとも九千年前以前のものであることが確実に、日本最古級の埋葬人骨と考えられるものです。サキタリ洞遺跡の人骨は、九千年前以前の人類が、洞穴を墓として利用していた可能性を物語っています。



▲サキタリ洞遺跡（南城市）の人骨出土状況

近年では、白保竿根田原洞穴遺跡で

も多数の旧石器人骨が検出されており、その中には一体分の人骨がまとまって出土する例をはじめ、つぶれた状態の頭骨、左右揃った同一個体の大腿骨がまとまって出土する例も見られることから、洞穴が墓として利用された可能性が指摘されています。白保竿根田原洞穴遺跡の事例では、人骨の配列が二次的に動かされていることから、土中に深く埋葬されたわけではなく、風葬のような形の墓だったのではないかと考えられています。

こうした事例から見ると、沖縄各地のフィッシャーや洞穴から発見されている旧石器人骨も、洞穴内に葬られたものなのかも知れません。このように、調査研究は現在も続いています。

その後の南島文化

サキタリ洞遺跡の発掘調査では、港川人の時代に続く一万四千年前の人骨と石英製石器、九千年前の押し文土器など、「空白の時代」を埋める手がかりも発見されつつあります。しかし、その後の時代に連続するまとまった文化



▲先史時代の食べ物（再現）

的証拠が現れるのは、七千年前以降のことです。

この頃になると気候の温暖化に伴って海面が上昇し、沿岸部に貝塚が形成されるようになります。サンゴ礁も大規模化し、四千年前頃までには現在見られるようなリーフ（礁嶺）とラグーン（礁池）の構造が形成されたと考えられています。四千年前頃の遺跡からは、サンゴ礁に生息するフダイ科やフエフキダイ科などの魚骨が大量に出土

することがあります。人々はサンゴ礁がもたらす豊かな恵みに適応した独自の南島文化を育んでいきました。朝鮮半島から稲作農耕が伝来し、九州で弥生時代が始まって以降も、沖縄の島々では海の資源に依存した漁撈採集のくらしが長く続きました。農耕社会の確立は九州よりもはるかに遅く、一世紀以降に始まるグスク時代を待たなければなりません。



▲沖縄の貝塚から出土する貝類（サンゴ礁や干潟で採取できる貝類からなる）

沖縄県立博物館・美術館へようこそ
サキタリ洞遺跡の出土品の一部は、沖縄県立博物館・美術館の博物館常設展でご覧いただくことができます。港川人や沖縄の旧石器人骨に関する展示のほか、沖縄の自然、歴史、文化についても総合的な展示を行っていますので、ぜひお立ち寄りください。港川人とその発見者、大山盛保氏については、八重瀬町立具志頭歴史民俗資料館でも、実物の化石や模型を通して詳しく紹介されています。また、ガンガラーの谷内にあるサキタリ洞遺跡の現地は、観光施設として一般に公開されており、洞穴内や調査区の様子を見学することができます。

Okinawa Prefectural Museum & Art Museum

沖縄県立博物館・美術館

住所：〒900-0006

沖縄県那覇市おもろまち
3丁目1番1号

電話：098-941-8200（代表）

開館時間：9時～18時（金・土は20時まで）

休館日：毎週月曜日（月曜が祝日等の場合は翌日）・年末年始など

<http://museums.pref.okinawa.jp>

【交通アクセス】

バス（那覇市内線）●3・7・10番線 県立博物館前バス停下車

●4・6番線 那覇メインプレイス東口バス停下車 徒歩5分

沖縄都市モノレール「ゆいレール」おもろまち駅下車 徒歩10分

駐車場台数 158台（無料）



文化庁
平成二九年度文化庁
地域の核となる美術館・歴史博物館支援事業
「カイトとリュウさんの博物館へ行こう」
その7 沖縄県立博物館・美術館
企画・編集…つらなる…つながる歴史ミュージアム実行委員会
マンガカ…宮野ミケ
大阪府立弥生文化博物館
テキスト…沖縄県立博物館・美術館 山崎真治
発行日…平成二九年七月四日
印刷所…株式会社中島弘文堂印刷所